

第2章

外的要因による死亡・ けがの状況

この章では、対策委員会の設置根拠となる
データを中心に記載しました。

1 死亡の状況

(1) 病気を含めた死亡原因

人口動態統計（死亡統計）によると、10歳から39歳の死亡原因の1位は「自殺」となっています。また、40歳から49歳まででは2位、50歳から59歳まででは4位であり、多くの年齢層において「自殺」は、死亡原因の上位を占めています。「自殺」以外の外的要因による死亡原因を見ると、10歳から39歳までの年齢層で「不慮の事故」が上位に入っています。

表 2-1 年齢層別死因順位（2006～15年間の年平均）

人口動態統計

年齢層	1位	2位	3位	4位	5位
0_4歳	その他症状他	先天奇形等	周産期の病態	染色体異常、神経系の疾患等	
5_9歳	先天奇形等	神経系の疾患、ウイルス肝炎等			
10_19歳	自殺	悪性新生物	不慮の事故、神経系の疾患		
20_29歳	自殺	不慮の事故	悪性新生物	脳血管疾患	心疾患
30_39歳	自殺	悪性新生物	不慮の事故	心疾患	脳血管疾患
40_49歳	悪性新生物	自殺	心疾患	脳血管疾患	消化器疾患
50_59歳	悪性新生物	心疾患	消化器疾患	自殺、脳血管疾患	
60_69歳	悪性新生物	心疾患	脳血管疾患	消化器疾患	肺炎
70_79歳	悪性新生物	心疾患	脳血管疾患	肺炎	消化器疾患
80_89歳	悪性新生物	心疾患	肺炎	脳血管疾患	消化器疾患
90歳以上	心疾患	老衰	悪性新生物	肺炎	脳血管疾患

(2) 全死亡者数に占める外的要因による死亡の割合

豊島区の死亡者全体に占める外的要因による死亡者の割合は、セーフコミュニティ認証取得後は国や東京都を下回る傾向にありましたが、近年は上回っています。

図2-1 外的要因による死亡者の割合(2010～2020)

人口動態統計

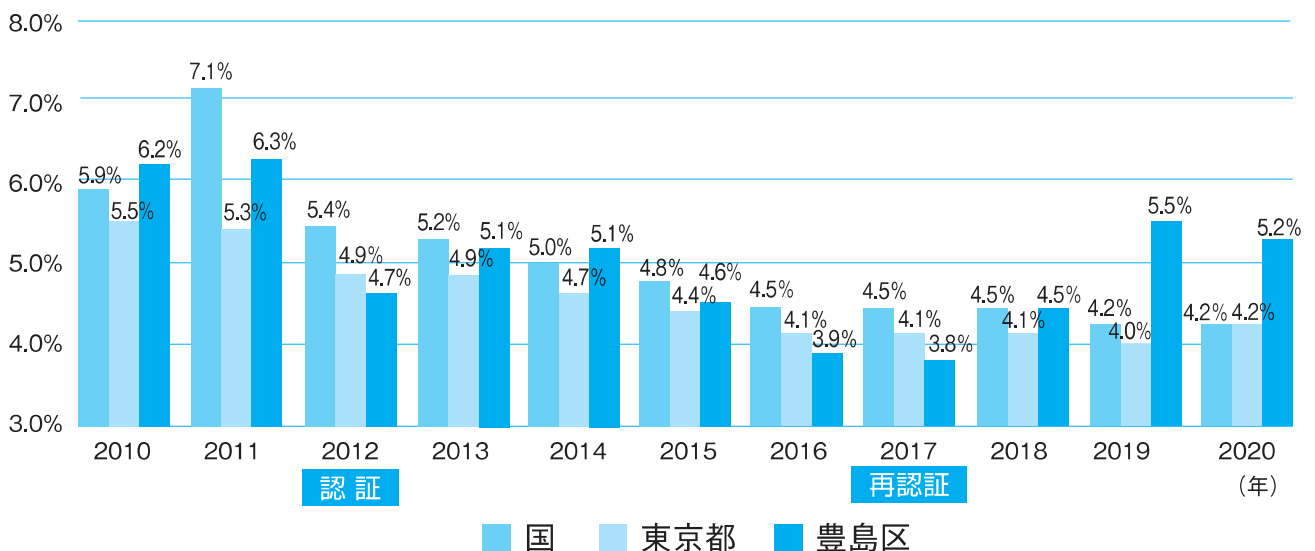


表 2-2 全死亡者数・外的要因による死亡者数の推移

人口動態統計

		2012 認証	2016	2017 再認証	2018	2019	2020
全死亡者数	国	1,256,359	1,307,748	1,340,397	1,362,470	1,381,093	1,372,648
	東京都	109,194	113,390	116,451	119,253	120,870	121,137
	豊島区	2,401	2,389	2,399	2,455	2,344	2,434
うち外的要因による死亡者数	国	67,464	59,323	60,794	61,245	58,609	58,291
	東京都	5,385	4,615	4,779	4,924	4,834	5,090
	豊島区	113	92	90	111	129	126

(3) 不慮の事故、自殺による死亡者の推移

人口10万人当たりの「不慮の事故」による死亡者を国、東京都、豊島区で比べると、豊島区は国を下回り、東京都を上回る傾向にあります。

一方、豊島区の人口10万人当たりの「自殺」による死亡者は、セーフコミュニティ認証取得までは国、東京都を上回っていましたが、取得後は、国、東京都とほぼ同水準で推移しています。

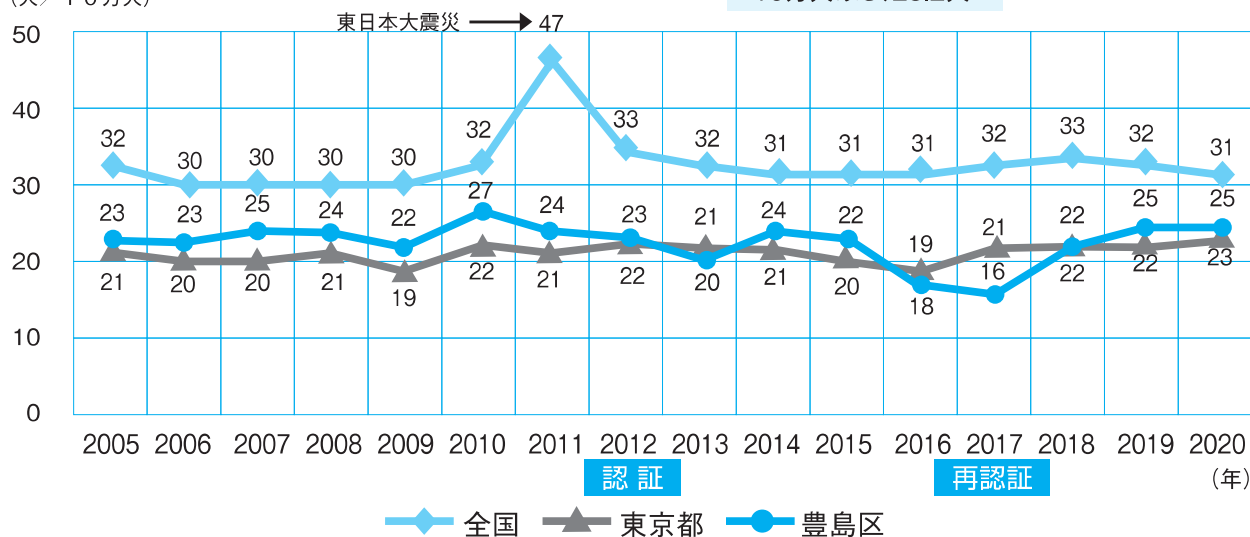
図 2-2 不慮の事故・自殺による死亡者の推移

不慮の事故による死亡者数

2020年豊島区75人
10万人あたり25.2人

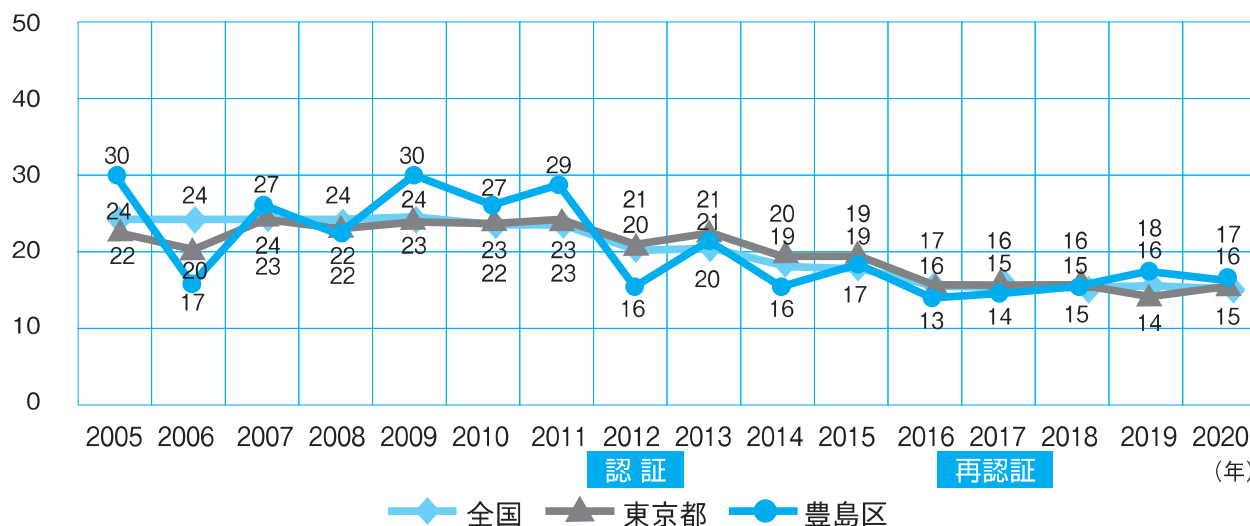
豊島区の保健衛生

(人/10万人)



自殺による死亡者数

(人/10万人)

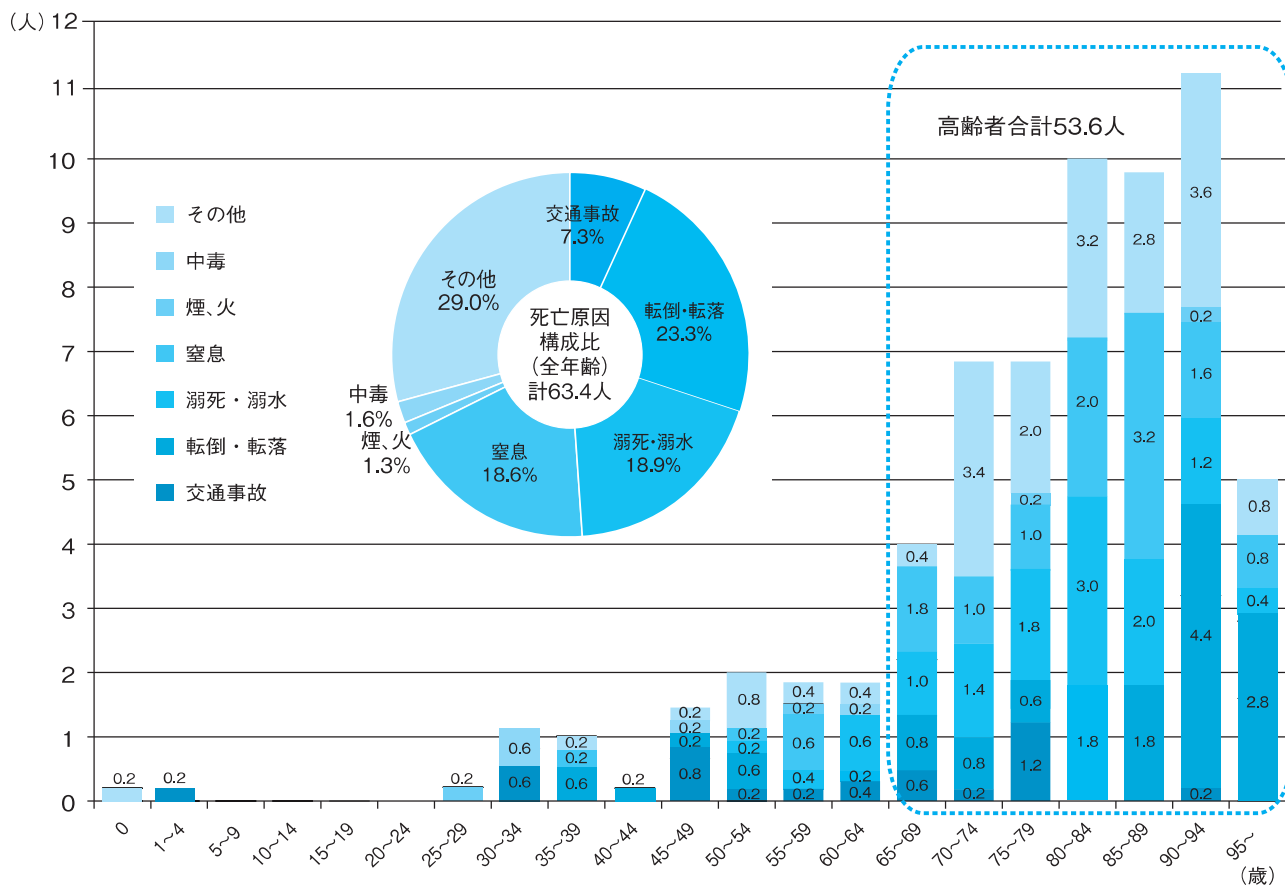


(4) 年齢別の不慮の事故、自殺の状況

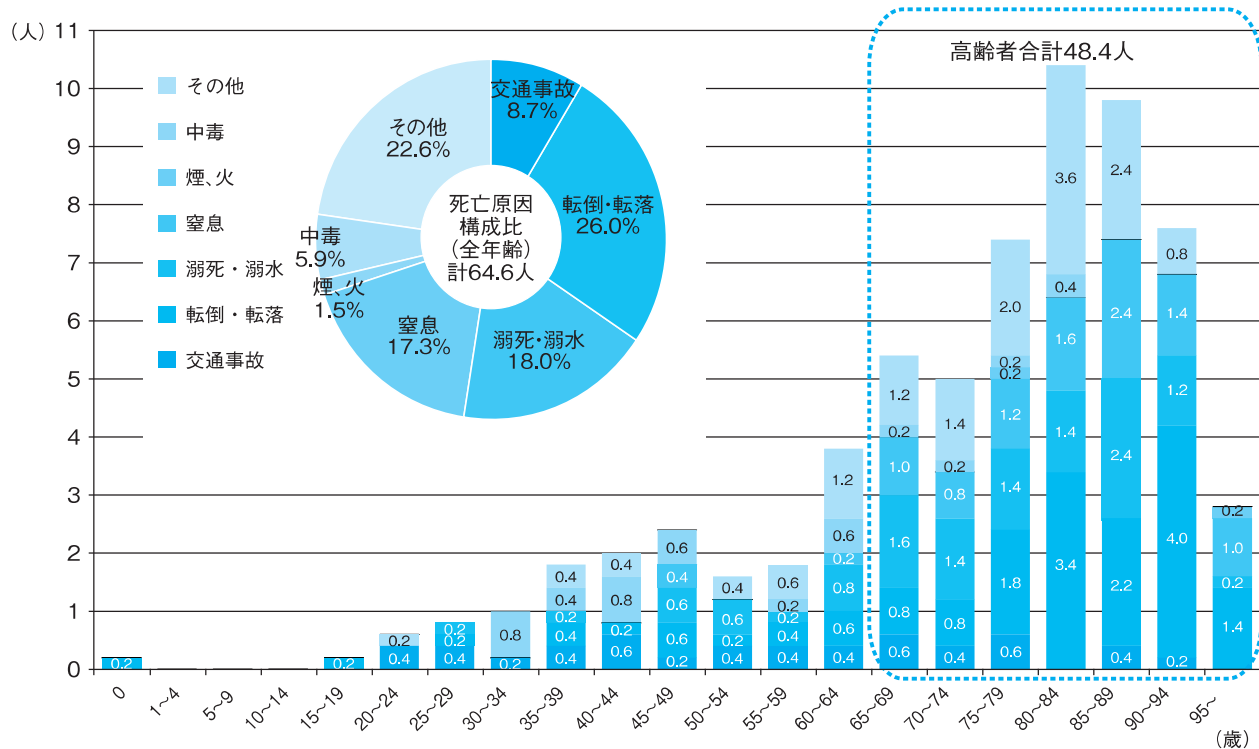
不慮の事故により毎年60人超が亡くなっています。不慮の事故による死亡者数は、2011年から2015年の年平均の64.6人から、2016年から2020年の年平均は63.4人とわずかに減少しています。高齢になるほど不慮の事故による死亡者数は多くなっており、2011年から2015年の年平均は48.4人（高齢者 / 全年齢75.0%）から、2016年から2020年の年平均は53.6人（同84.5%）と増加しています。

図2-3 不慮の事故による年齢別・原因別の死亡者数(2016~20平均)

人口動態統計

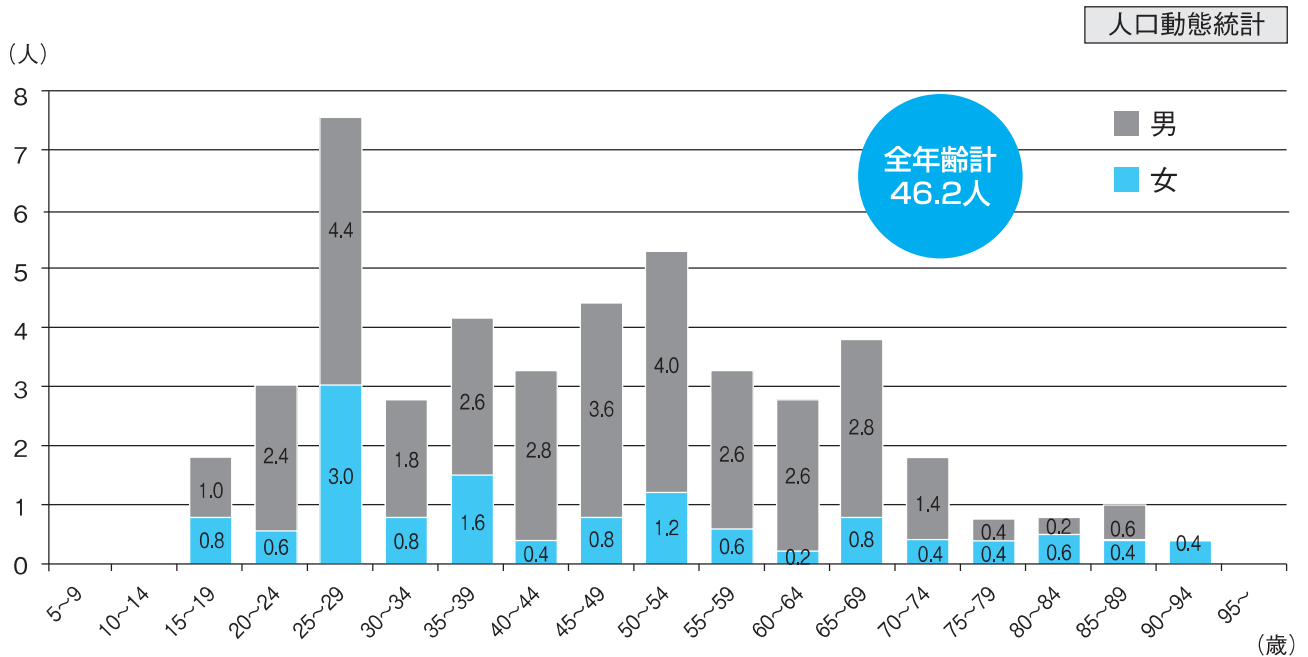


不慮の事故による年齢別・原因別の死亡者数(2011~15平均)【再認証取得時データ】

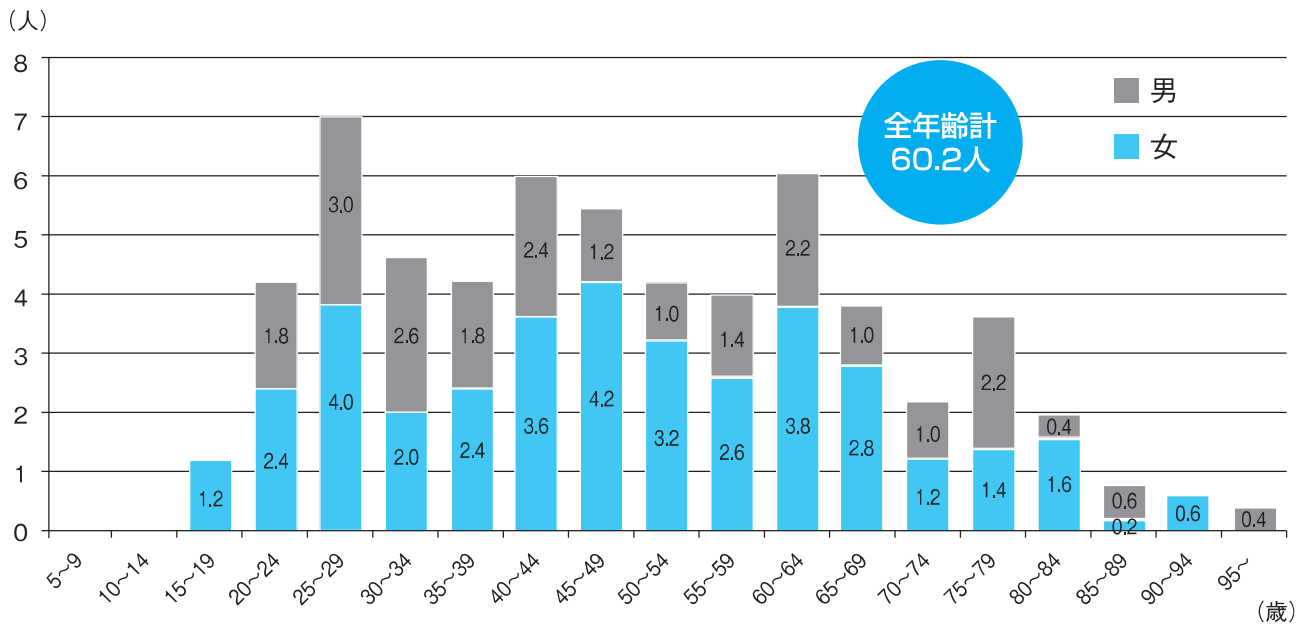


自殺によって、2011年から2015年は毎年60人程度が亡くなっていましたが、2016年から2020年平均では46.2人と減少しました。年齢別では、20代の自殺者数が多くなっています。

図 2-4 自殺による年齢別の死亡者数（2016～20平均）



自殺による年齢別の死亡者数(2011~15平均)【再認証取得時データ】

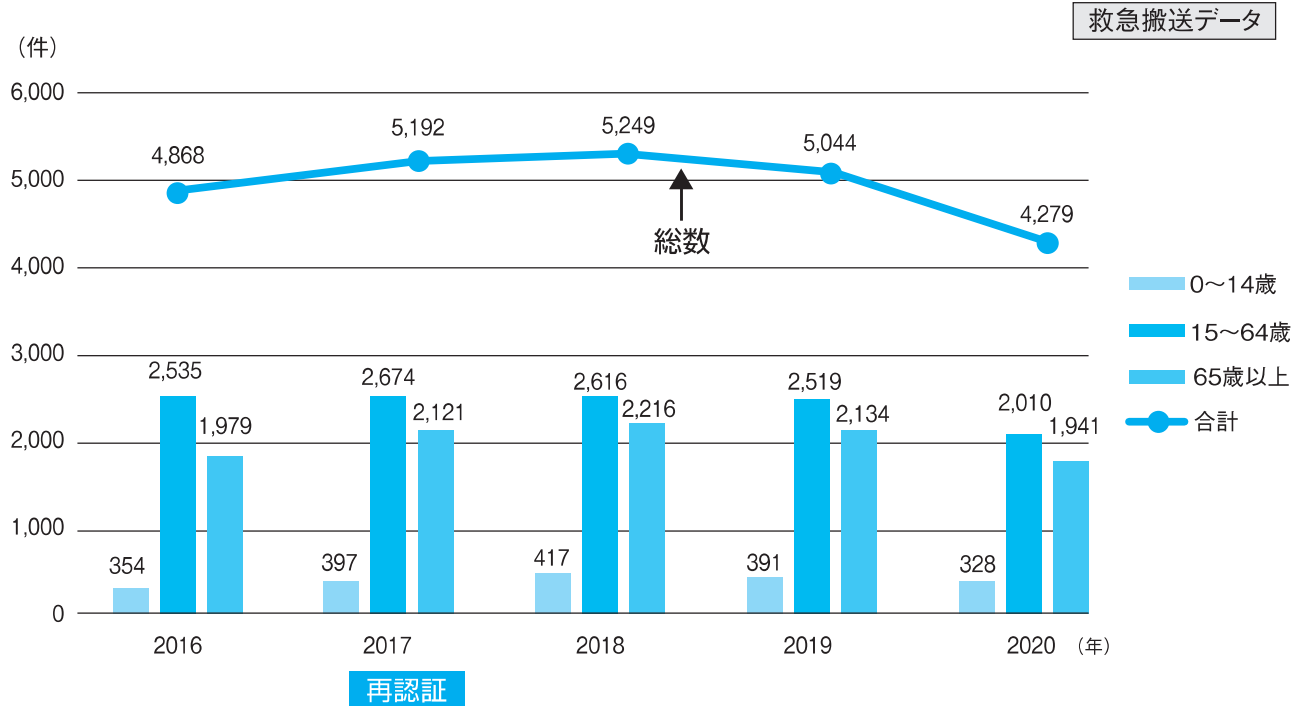


2 けが等の状況

(1) 救急搬送によるけがの状況

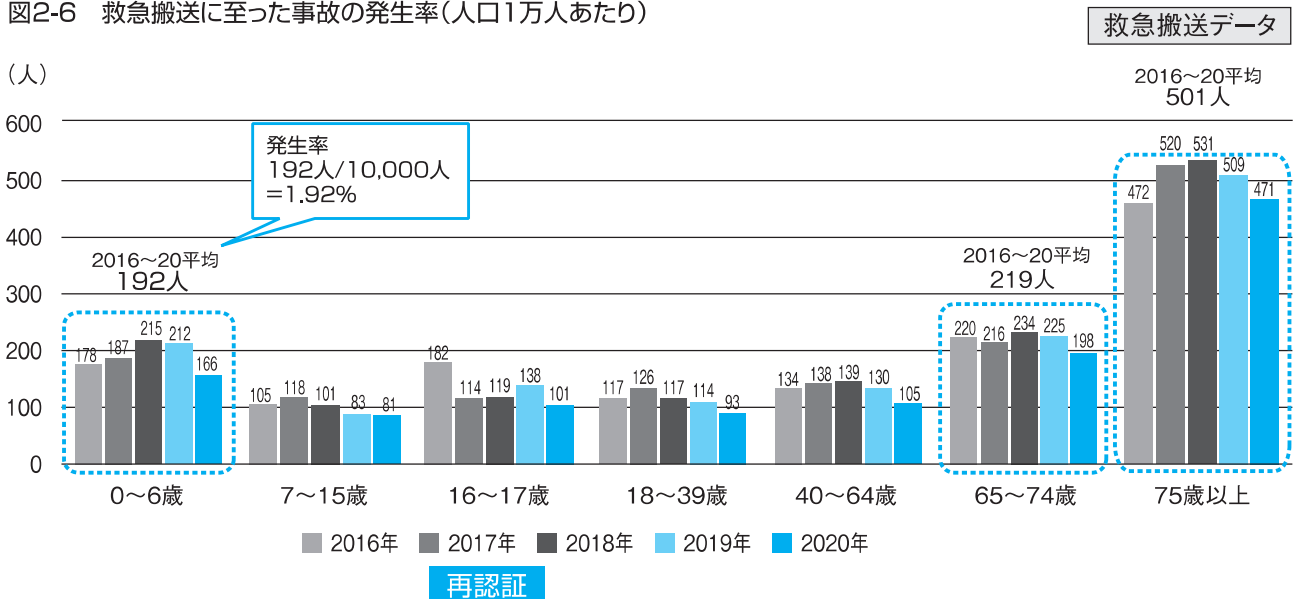
区内で発生したけが・事故による救急搬送は、毎年 5,000 件程度ありますが、新型コロナウイルス感染症に伴う移動制限等の影響により、2020年は前年比で15%程度減少しています。年代別の救急搬送数は、15～64歳が多くなっています。

図2-5 救急搬送数の推移(総数・年代別)



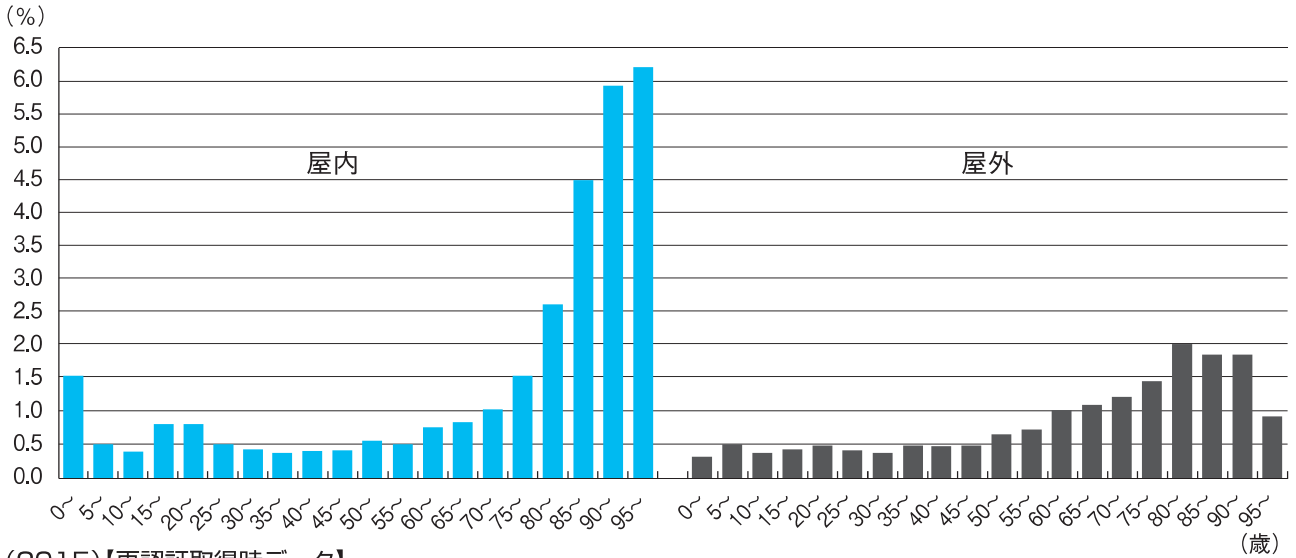
各年齢層の人口をもとに各年齢での発生率を算出すると、0～6歳と高齢者、特に75歳以上の高齢者の発生率が高くなっています。

図2-6 救急搬送に至った事故の発生率(人口1万人あたり)

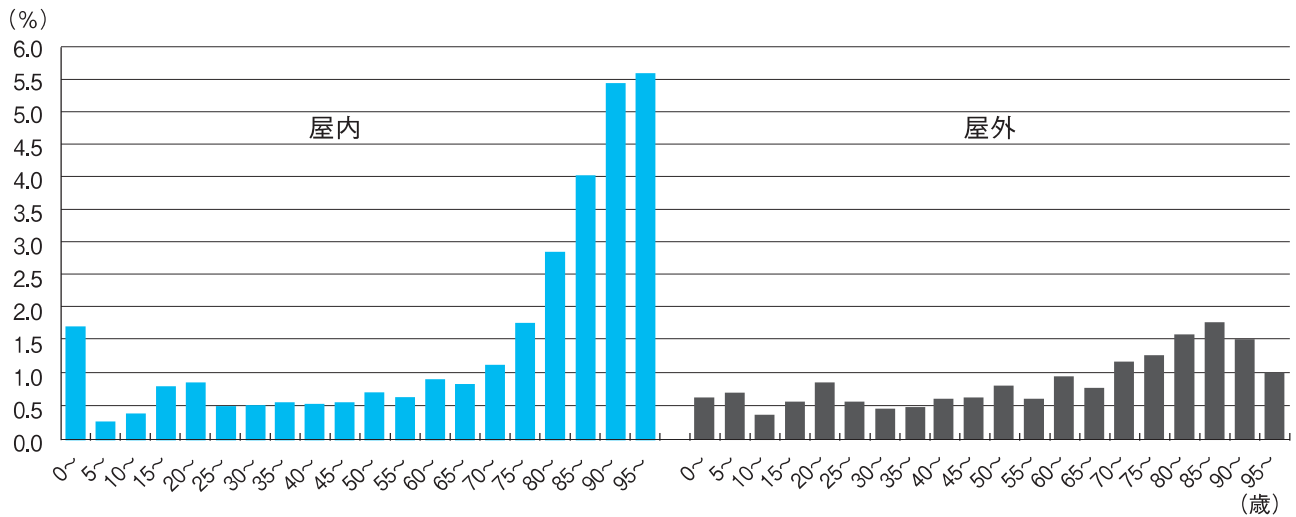


また、屋外よりも屋内での発生率が高く、さらに屋内では0～4歳の乳幼児と75歳以上の高齢者の発生率が高くなっています。

図2-7 屋内・屋外別の救急搬送に至った事故の発生率 (2020)



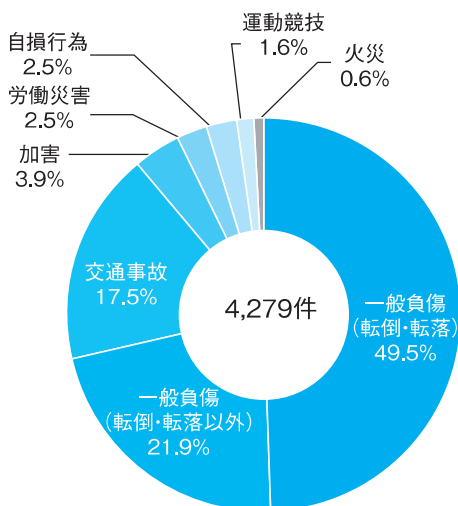
(2015)【再認証取得時データ】



救急搬送データ事故の種別ごとに救急搬送の状況をみると、全年齢では転倒・転落の割合が最も多く、次に交通事故となっています。

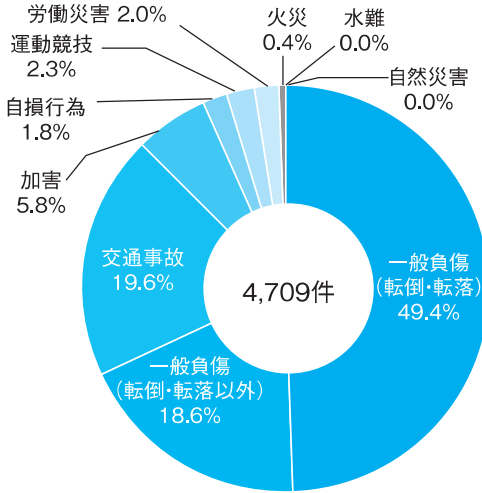
救急搬送データ

図2-8 事故種別 (2020)



	全年齢	
	うち0～14歳	うち65歳～
合計	4,279	328 (100.0%) 1,941 (100.0%)
一般負傷 (転倒・転落)	2,117	124 (37.8%) 1,419 (73.1%)
一般負傷 (転倒・転落以外)	939	133 (40.5%) 318 (16.4%)
交通事故	747	51 (15.5%) 154 (7.9%)
加害	167	5 (1.5%) 16 (0.8%)
自損行為	106	0 (0.0%) 7 (0.4%)
運動競技	69	14 (4.3%) 3 (0.2%)
労働災害	107	0 (0.0%) 16 (0.8%)
火災	25	1 (0.3%) 6 (0.3%)
水難	2	0 (0.0%) 2 (0.1%)
自然災害	0	0 (0.0%) 0 (0.0%)

(2015) 【再認証取得時データ】

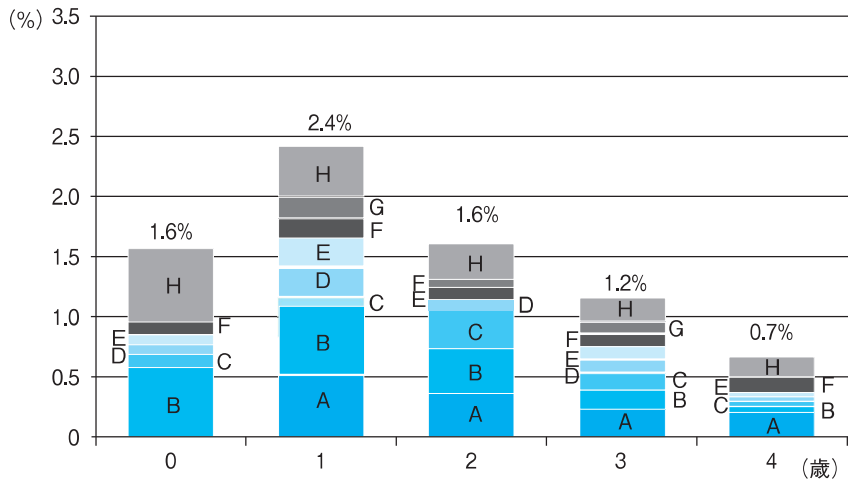


	全年齢	
	うち 0～14 歳	うち 65 歳～
合計	4,709	354 (100.0%) 1,816 (100.0%)
一般負傷 (転倒・転落)	2,328	139 (39.3%) 1,372 (75.6%)
一般負傷 (転倒・転落以外)	876	124 (35.0%) 239 (13.2%)
交通事故	925	77 (21.8%) 162 (8.9%)
加害	275	2 (0.6%) 16 (0.9%)
自損行為	84	0 (0.0%) 9 (0.5%)
運動競技	106	12 (3.4%) 6 (0.3%)
労働災害	96	0 (0.0%) 8 (0.4%)
火災	18	0 (0.0%) 3 (0.2%)
水難	1	0 (0.0%) 1 (0.1%)
自然災害	0	0 (0.0%) 0 (0.0%)

(2) 子どものけが

0歳～4歳の子どものけがについて、屋内におけるけがの救急搬送の発生率をみると、1歳が高く、その後、年齢を重ねるとにけがの発生率は低くなっています。けがの原因は、転倒と転落・滑落が大半を占めています。

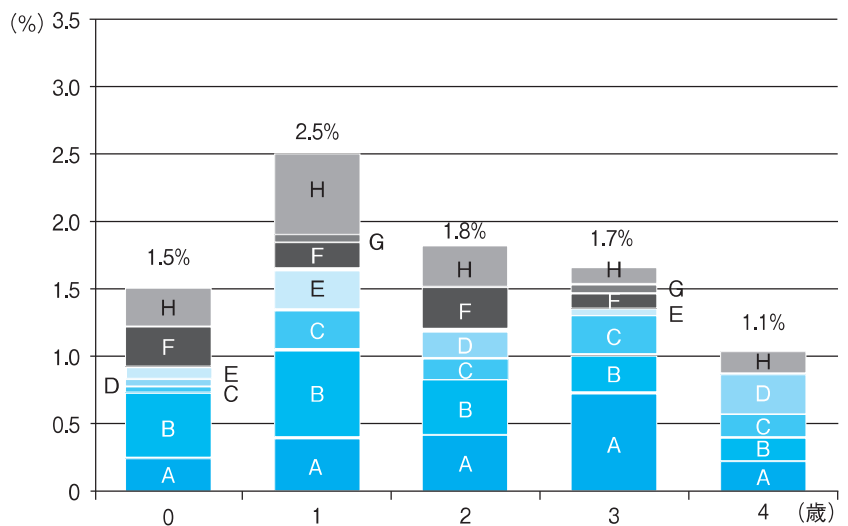
図2-9 4歳以下の屋内のけがの原因 (2020) n=143人



救急搬送データ

- H その他
- G 引きずられ
- F 異物
- E 高熱物・燃焼物
- D 挟まれ・巻き込まれ
- C 衝突・ぶつかり
- B 転落・滑落
- A 転倒

(2015)【再認証取得時データ】 n=161人

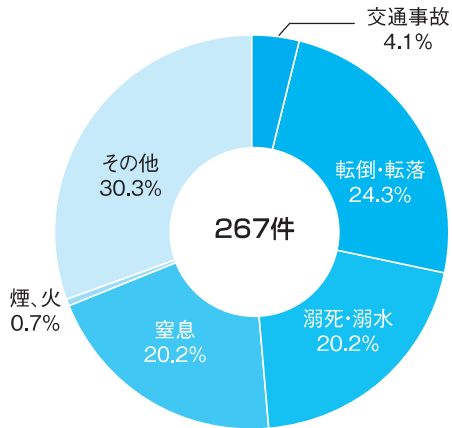


- H その他
- G 引きずられ
- F 異物
- E 高熱物・燃焼物
- D 挟まれ・巻き込まれ
- C 衝突・ぶつかり
- B 転落・滑落
- A 転倒

(3) 高齢者のけが

高齢者の不慮の事故による死亡原因は、転倒・転落、溺死・溺水、窒息の3つが主な要因です。高齢者のけがの状況を救急搬送データからみると、転倒と転落・滑落を合わせて7割以上を占めています。

図2-10 高齢者の不慮の事故による死亡原因
(2016~20)



(2011~15)【再認証取得時データ】

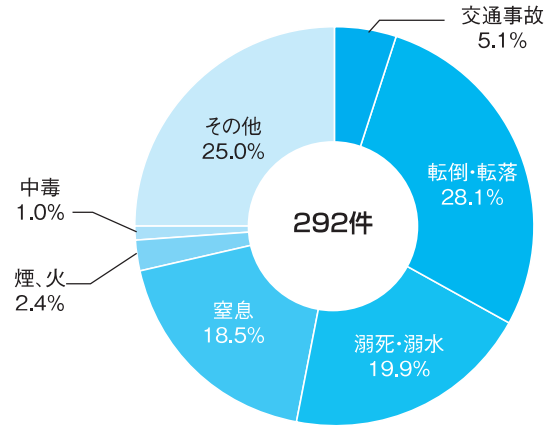
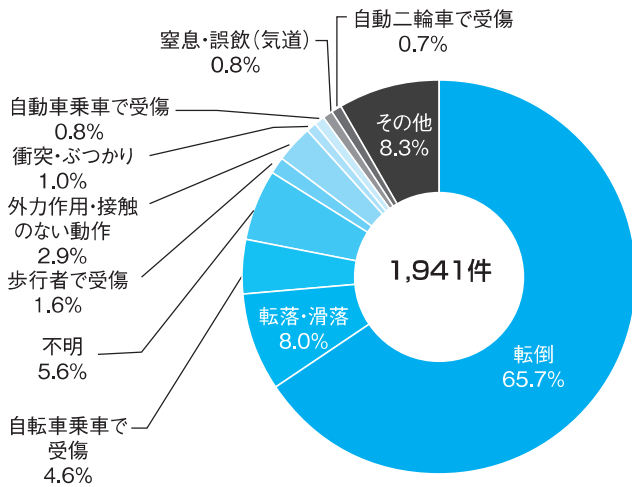
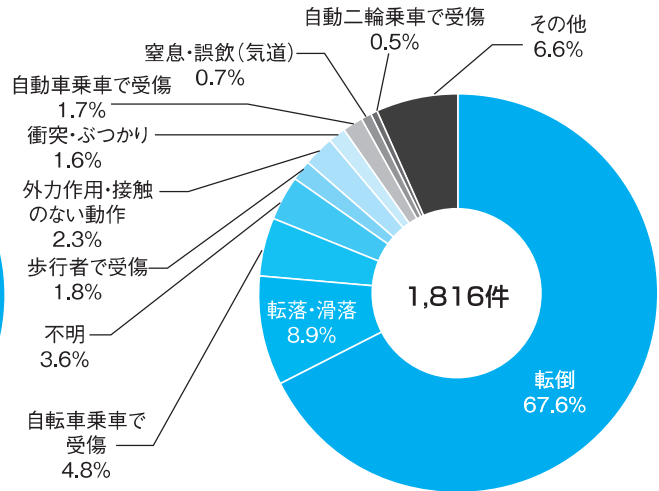


図2-11 高齢者のけがによる救急搬送の原因
(2020)

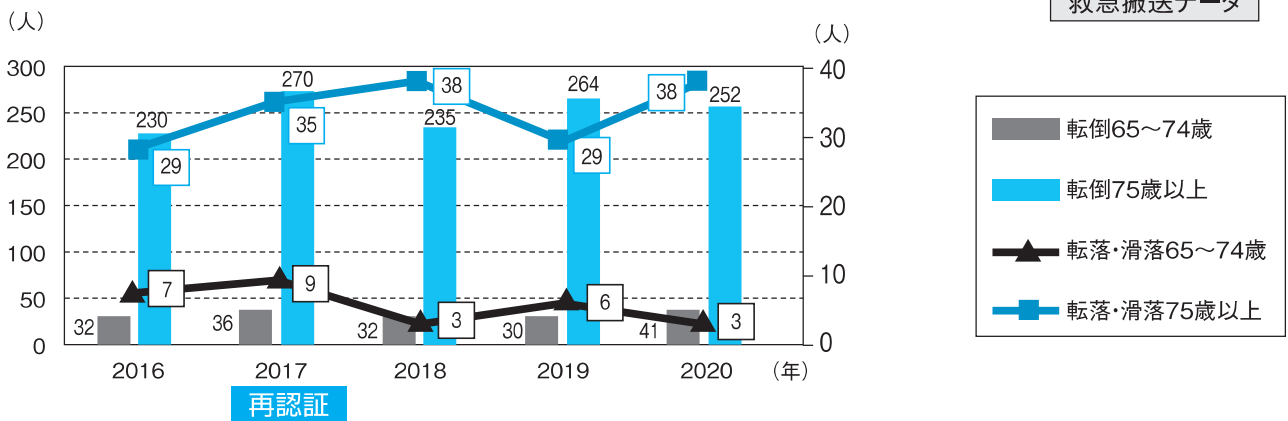


(2015)【再認証取得時データ】



高齢者の屋内における転倒・転落による中等症以上のけがの推移では、増加傾向にあることが見て取れます。

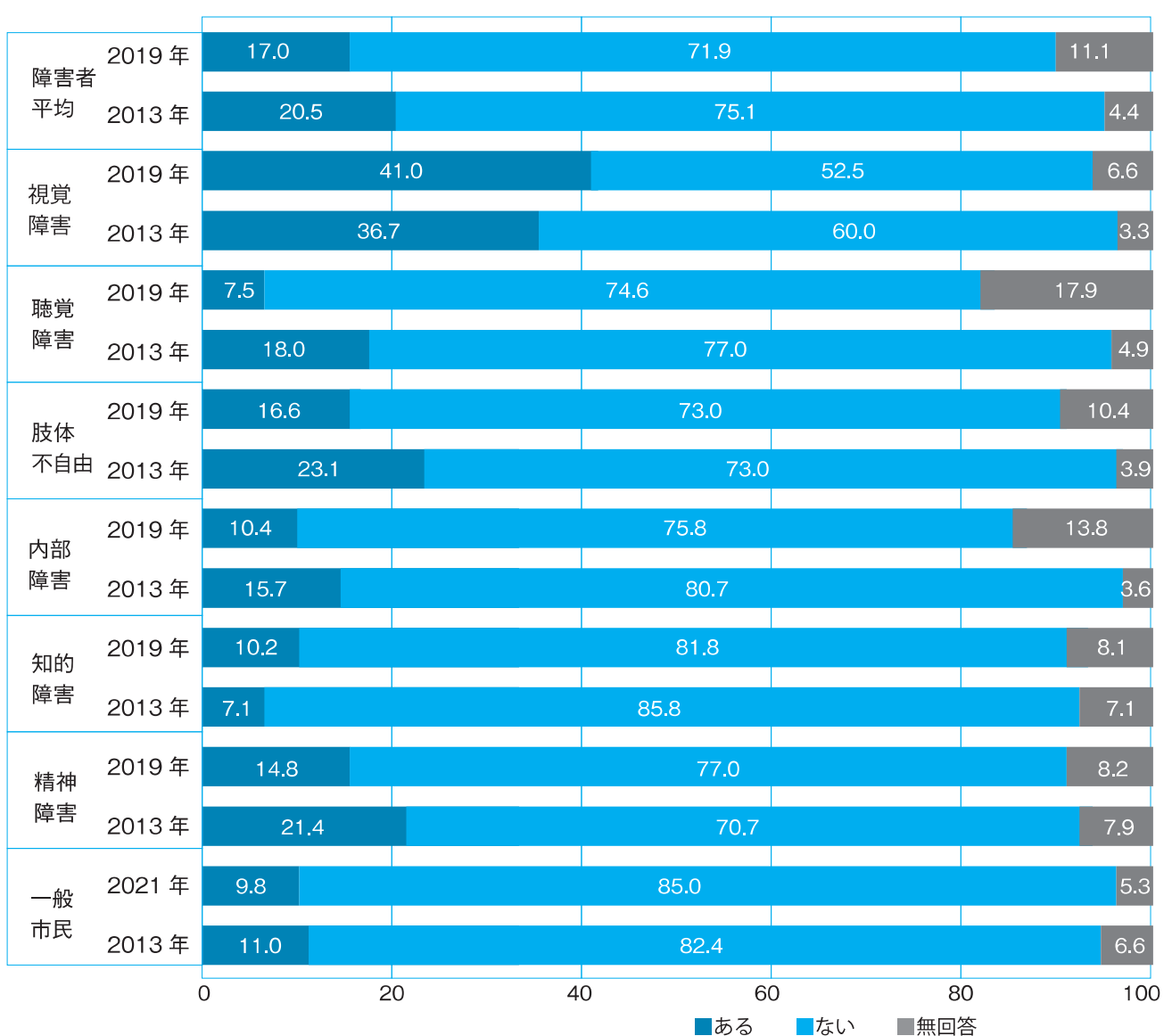
図2-12 屋内における転倒・転落による中等症以上のけがの推移



(4) 障害者のけが

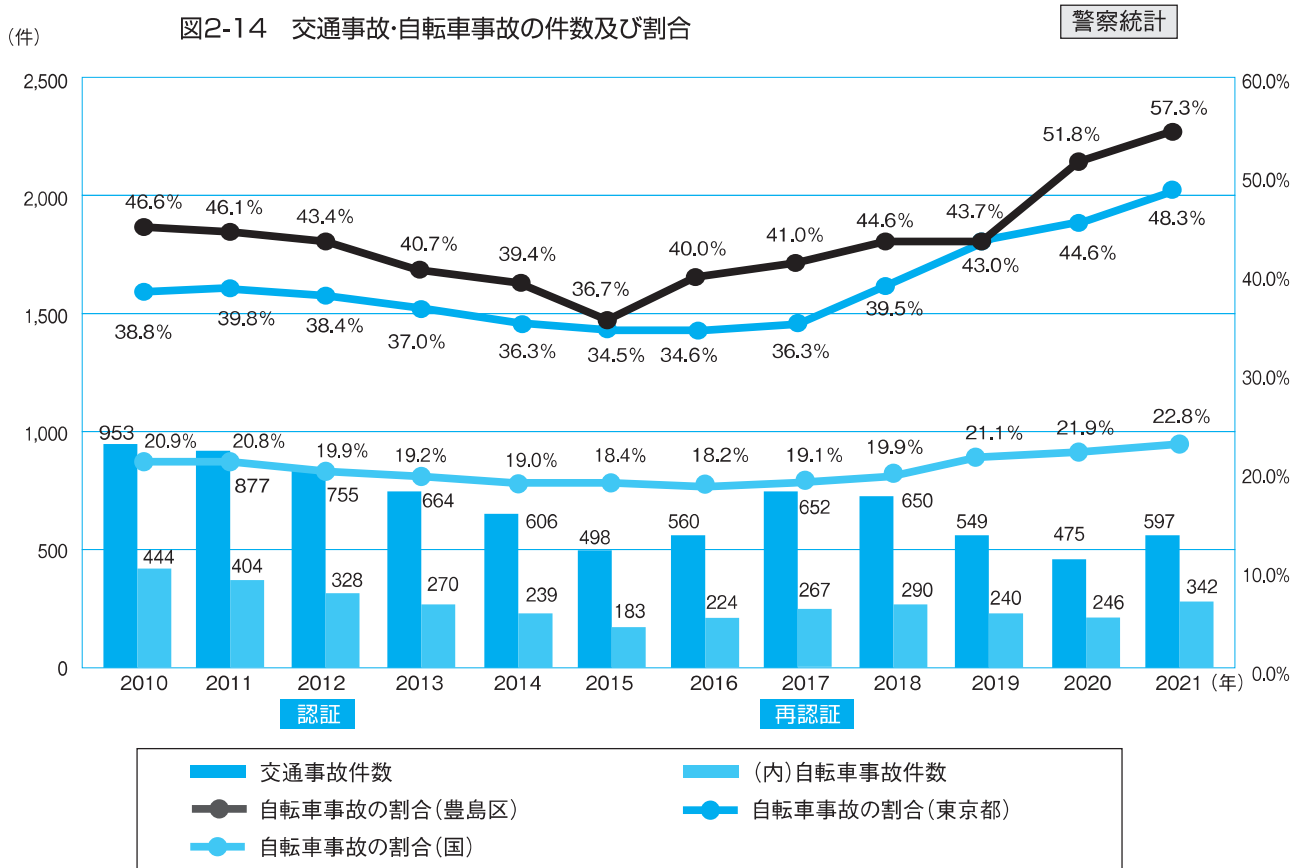
一般区民（18歳以上）のけがの経験率は10%前後ですが、障害者のけがの経験率は区民平均よりも高くなっています。認証当時と比較すると、一般区民と障害者の経験率が下がっている中で、視覚障害者は上昇傾向にあります。

図2-13 障害別の外出時のけがの経験



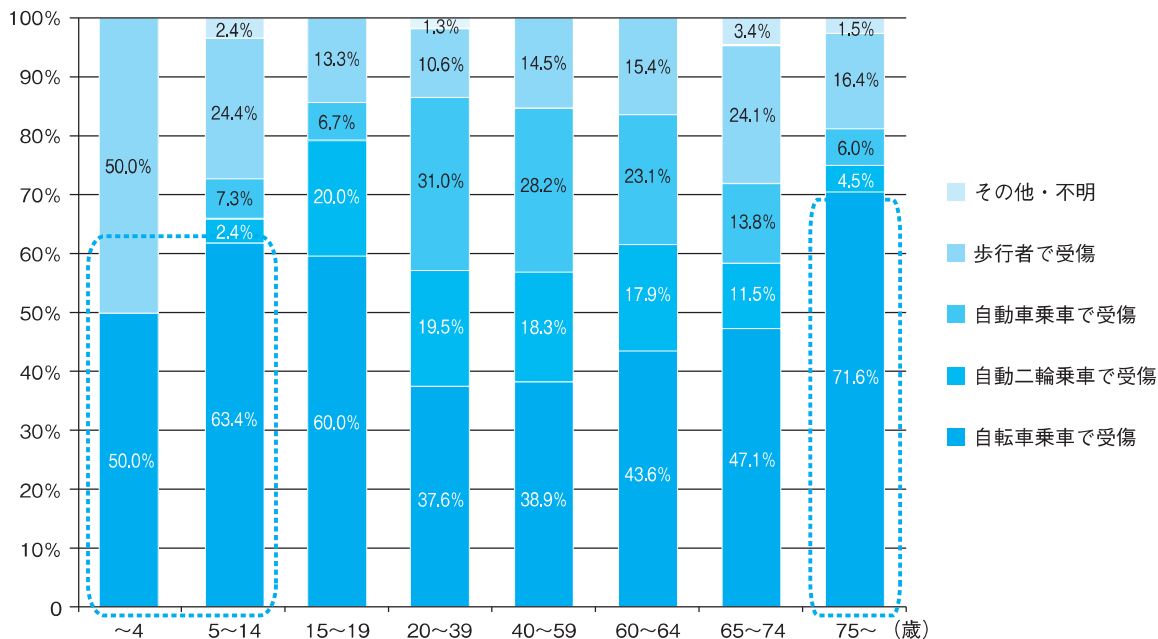
(5) 交通事故によるけが

豊島区内の交通事故および自転車事故の件数は、減少傾向にあります。交通事故に占める自転車事故の割合は減少を続けていましたが、2016年に増加に転じています。依然として国や都に比べ、自転車事故の割合は、高い状況にあります。

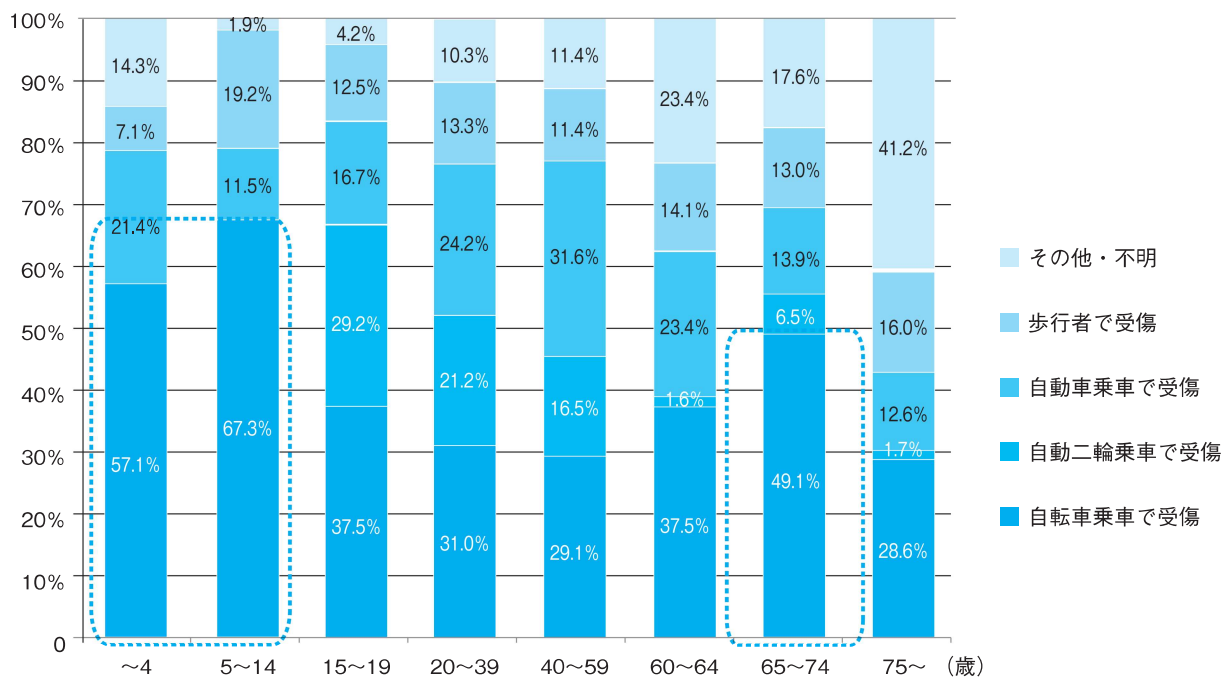


救急搬送データから年代別交通事故発生状況を見ると、子どもと高齢者で自転車乗車中の事故の割合が高くなっています。2015年に比べ、2020年ではほぼ全ての年代で自転車乗車中の事故の割合が高くなっています。

図2-15 年代別交通事故の発生状況 (2020)



(2015) 【再認証取得時データ】



(6) 加害によるけが

加害によるけがは、毎年270件前後発生していましたが、2018年に減少に転じています。また、犯罪発生件数は一時的に多かった年がありますが、減少傾向にあります。また、加害によるけがと犯罪の大半は、池袋駅周辺で発生しています。

図2-16 加害によるけがの発生状況

救急搬送データ

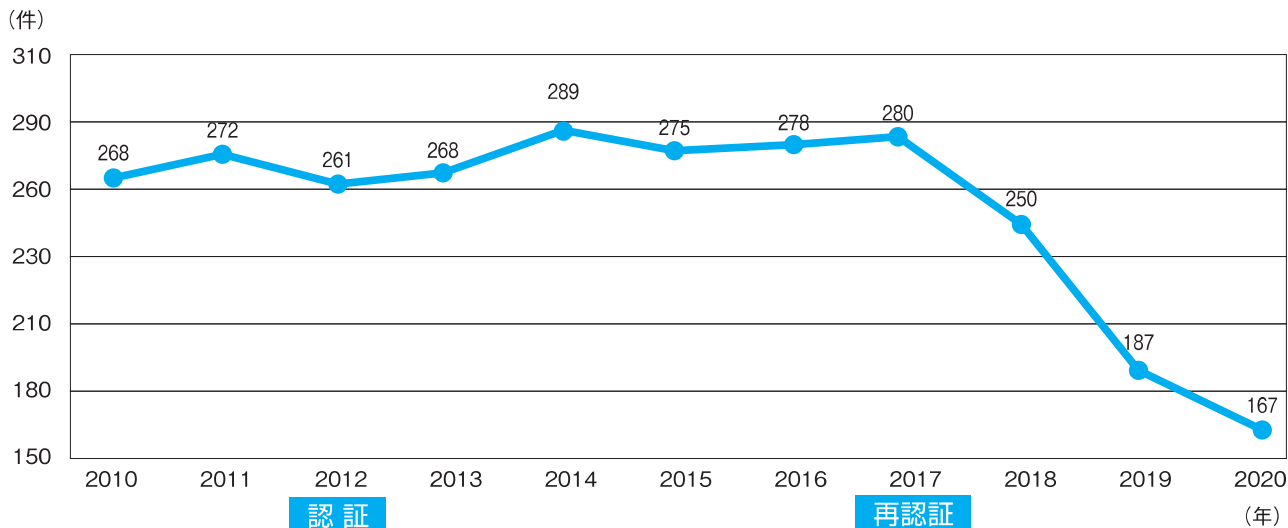


図2-17 加害によるけがの発生場所 (2020)

救急搬送データ

(2015) 【再認証取得時データ】

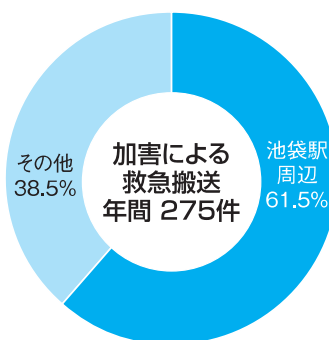
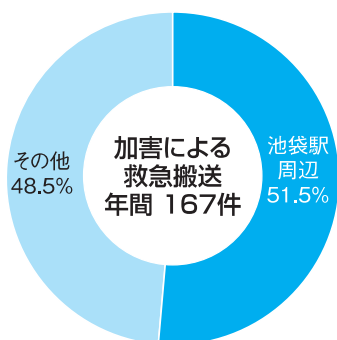


図2-18 犯罪発生状況

警察統計

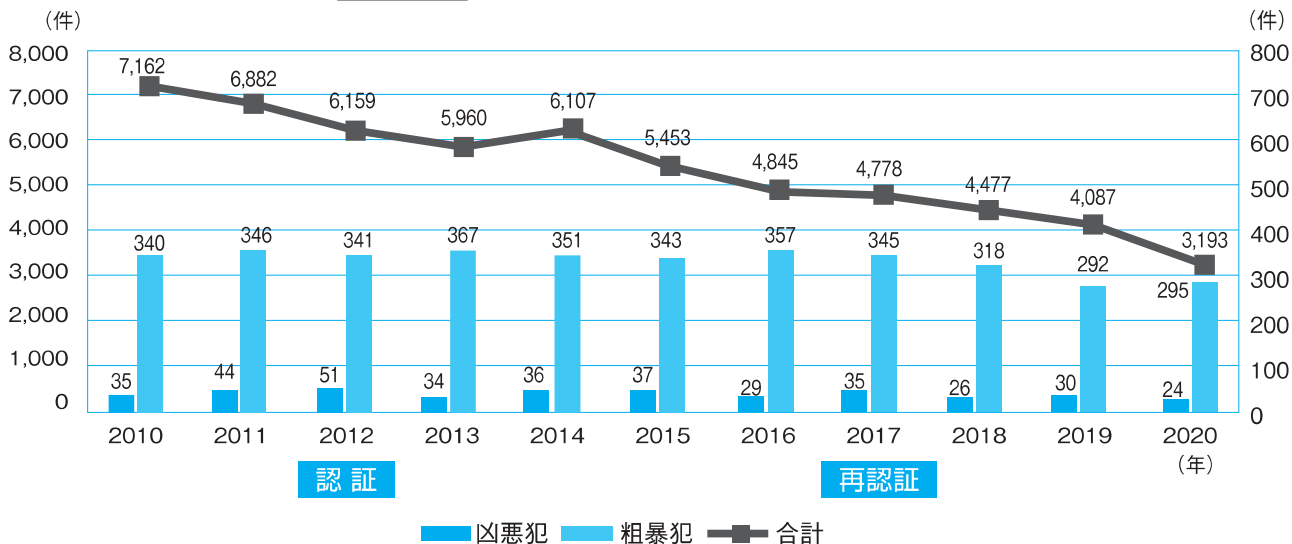
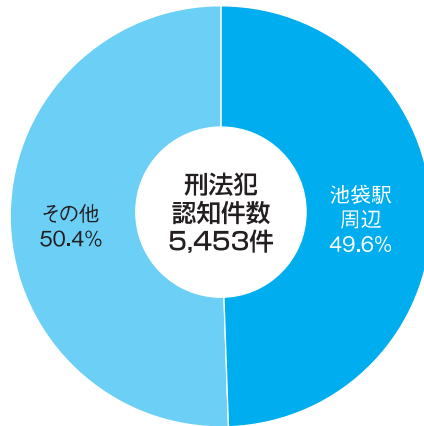
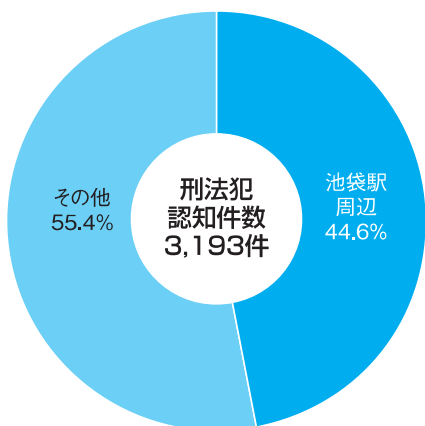


図2-19 犯罪の発生場所
(2020)

警察統計

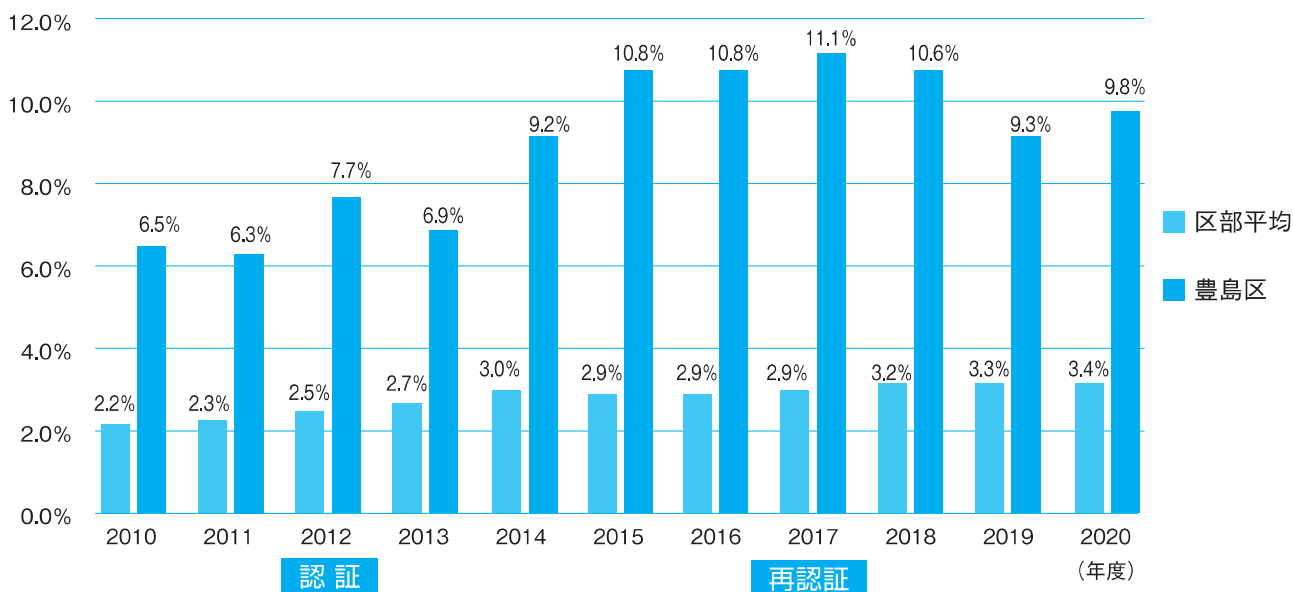
(2015)【再認証取得時データ】



豊島区の子童虐待等相談発生率は、増加傾向にあり、常に23区平均より高くなっています。

図2-20 0～17歳の子童人口に対する虐待等相談発生率の推移

相談窓口調べ



豊島区在住の満20歳以上の男女750人ずつを対象とした意識調査において、パートナーから暴力を受けたことがあると回答した人の割合は、おおむね2割程度でしたが、2020年は12.6%に減少しました。一方、DVの相談件数は増加傾向にあります。

図 2-2-1 パートナーから暴力を受けた経験の有無

男女共同参画社会に関する住民意識調査

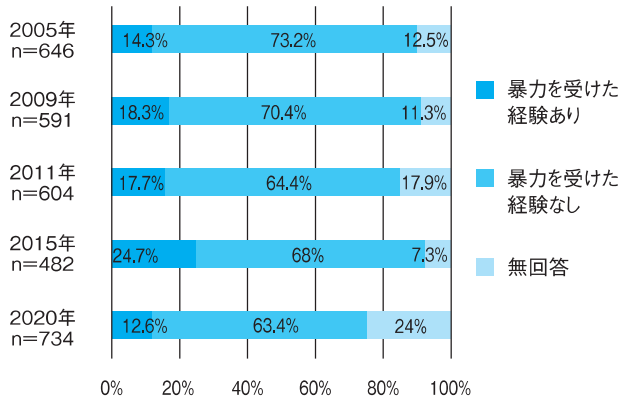
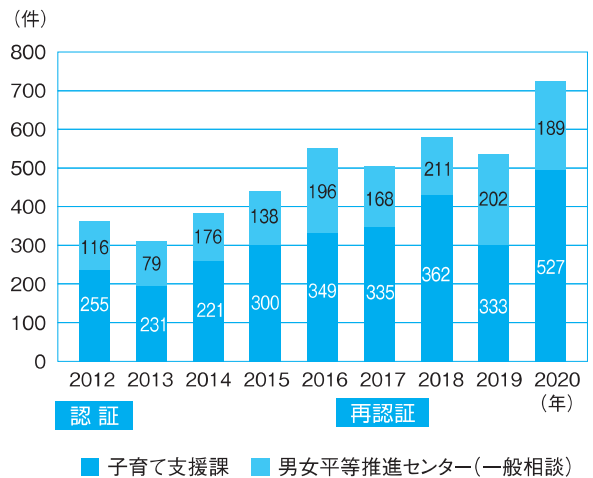


図 2-2-2 DV 相談件数の推移

窓口調べ



(7) 労働によるけが / スポーツ事故によるけが

労働災害事故による救急搬送は、年によって増減はあるものの毎年90件以上発生しており、救急搬送全体の2.4%を占めます。また、運動競技事故による救急搬送は、毎年100件前後発生し、全年齢では2.1%ですが、0~14歳では4.6%と高くなっています。

図2-23 労働災害事故の救急搬送の推移

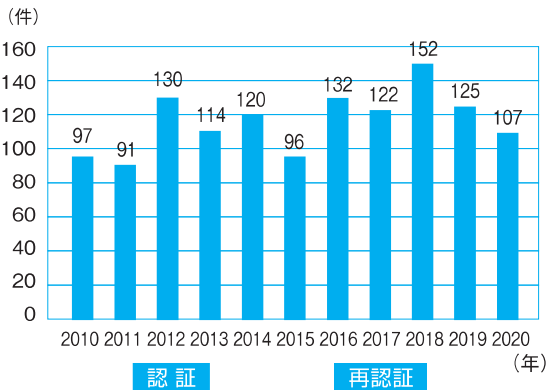


図2-24 運動競技事故による救急搬送の推移

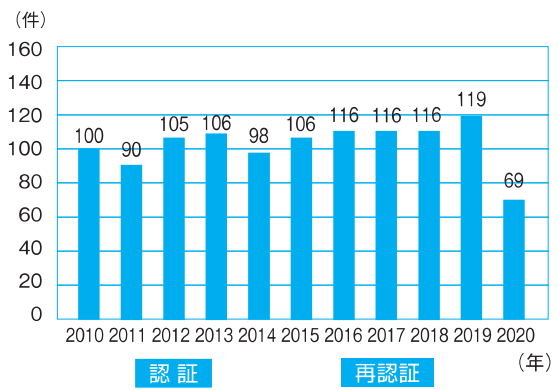
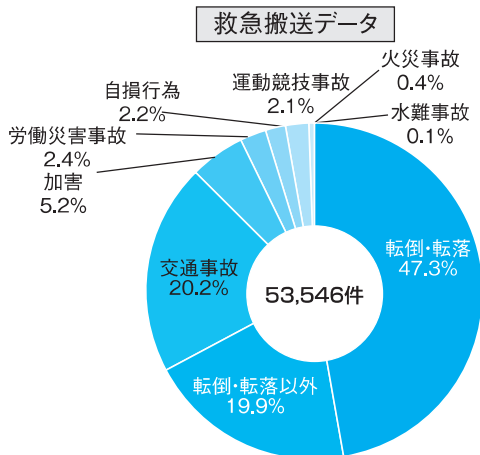


図2-25 事故種別(2010~2020累計)

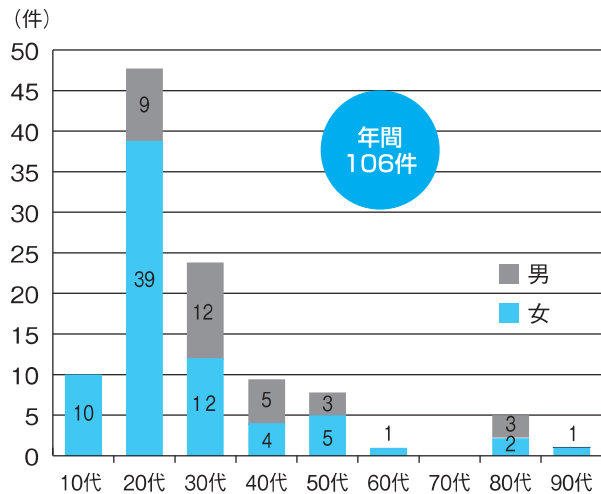


	全年齢			
	うち0~14歳		うち65歳~	
合計	53,546	3,929 (100%)	10,311 (100%)	
一般負傷(転倒・転落)	25,352	1,527 (38.9%)	15,128 (73.1%)	
一般負傷(転倒・転落以外)	10,659	1,441 (36.7%)	3,081 (14.9%)	
交通事故	10,823	718 (18.3%)	1,876 (9.1%)	
加害	2,795	52 (1.3%)	204 (1.0%)	
労働災害事故	1,286	0 (0.0%)	132 (0.6%)	
自損行為	1,171	4 (0.1%)	105 (0.5%)	
運動競技事故	1,141	182 (4.6%)	49 (0.2%)	
火災事故	240	3 (0.1%)	65 (0.3%)	
水難事故	66	1 (0.0%)	56 (0.3%)	
自然災害事故	13	1 (0.0%)	6 (0.0%)	

(8) 自傷行為によるけが

自傷行為による救急搬送は、2020年では年間106件発生しています。年齢層別にみると20代と30代が多く、その中でも女性が多くなっています。受傷程度は、若い年齢層では軽症の割合が高く、反対に高齢層では受傷程度が重くなる傾向にあります。

図2-26 性別・年齢階層別件数
(2020)



救急搬送データ

(2015)【再認証取得時データ】

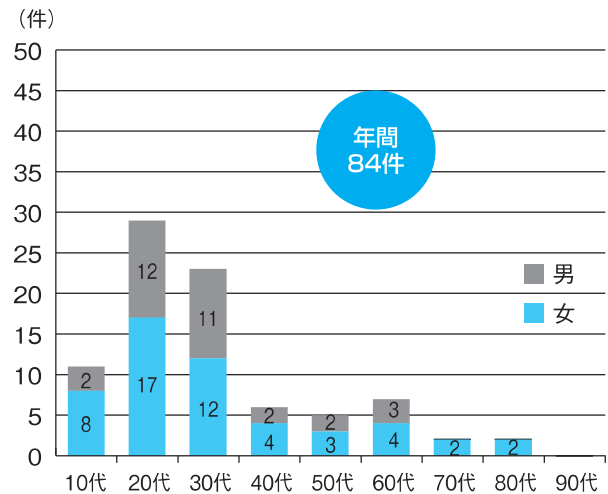
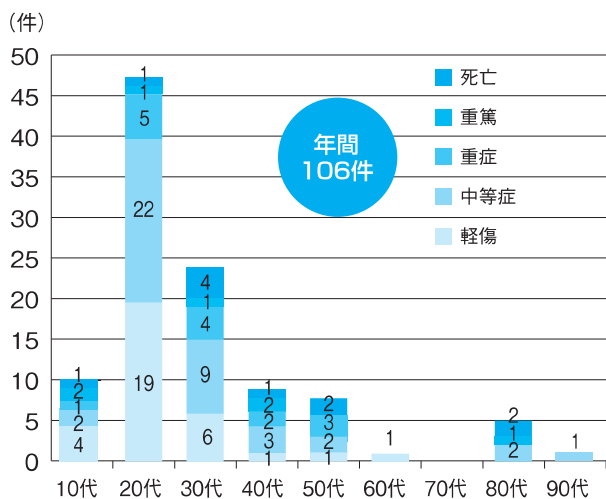
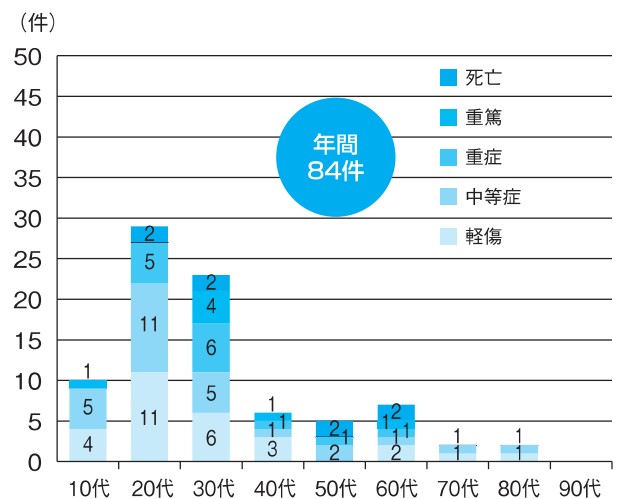


図2-27 年齢階層別・受傷程度
(2020)



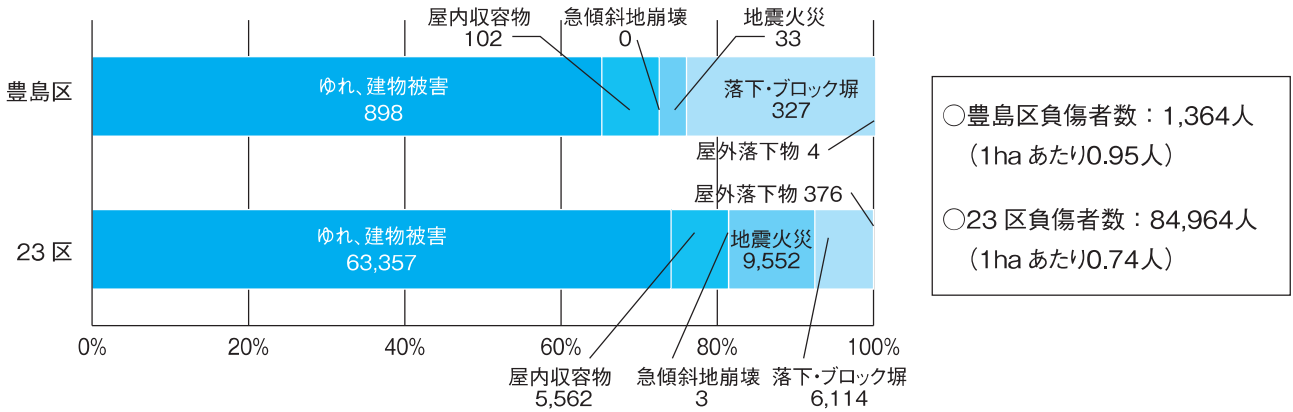
(2015)【再認証取得時データ】



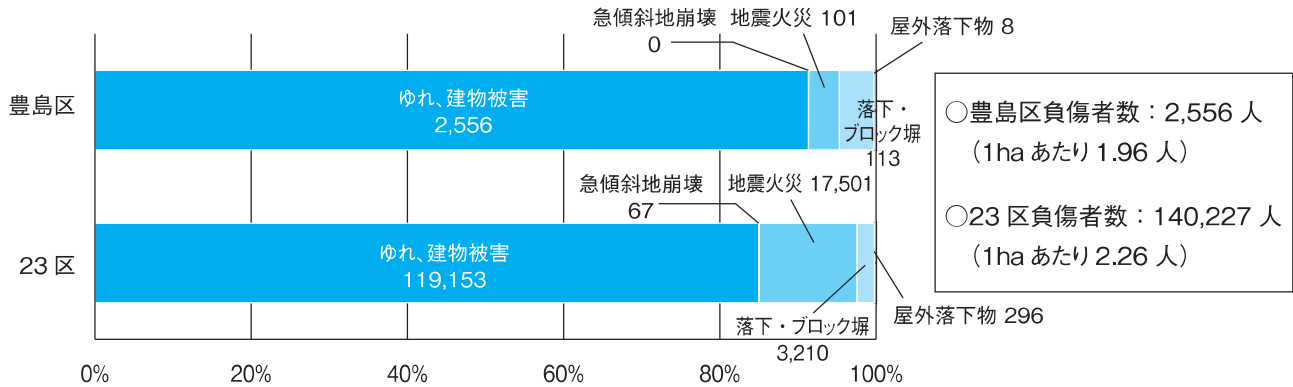
(9) 地震災害による被害想定

豊島区が位置する南関東では、今後30年以内にマグニチュード7クラスの大地震が70%の確率で発生すると想定されます。2012年時点では23区を下回る想定となっていたのですが、2022年時点の被害想定では、豊島区の負傷者は23区平均を上回っています。

図2-28 首都直下地震による被害想定:負傷者数(2022年、東京都)

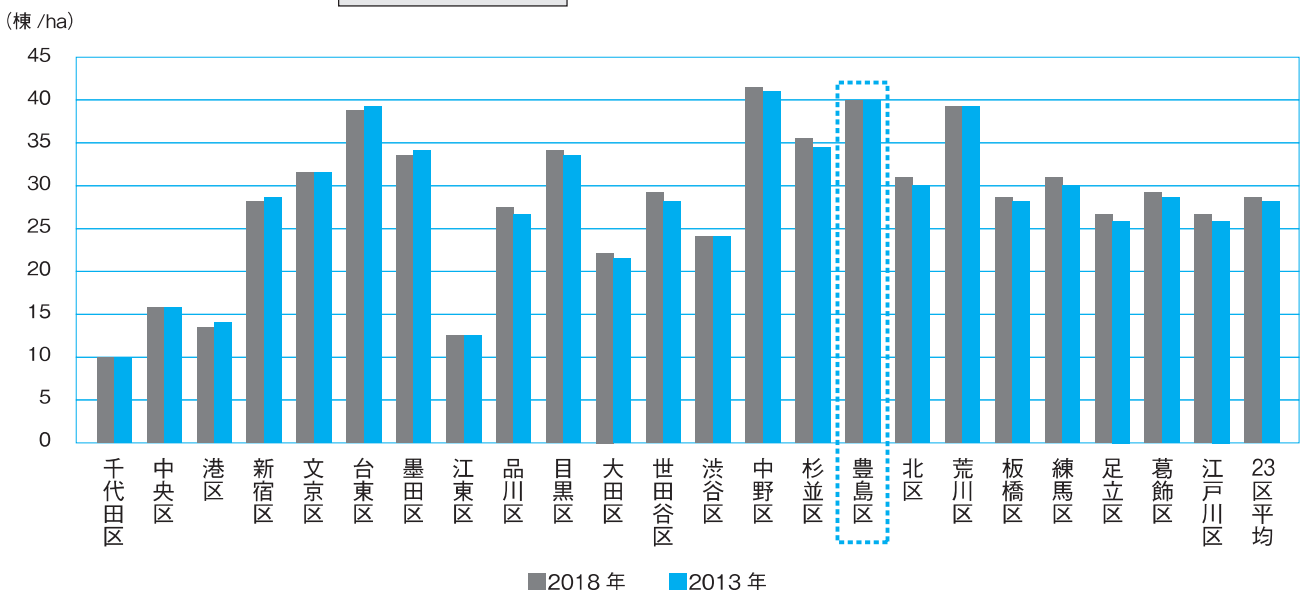


(2012年、東京都)【再認証取得時データ】



豊島区の建物棟数の密度は、認証取得時点では23区の中で最も高い状況にあり、直近のデータでも中野区に次いで高く、大地震による同時多発的な火災に対して被害の拡大が懸念されます。

図2-29 23区の建物密度 土地利用現況調査



3 重点テーマの設定根拠

豊島区は、人口動態統計、救急搬送データ、アンケート調査、警察統計などの事故やけがのデータの分析結果や推進協議会、サーベイランス委員会における議論を踏まえ、優先的に取り組む外傷予防の対象となる重点テーマを設定し、予防活動を展開しています。

	データの状況	図表番号	テーマ設定
1	■乳幼児の救急搬送を必要とするけがや事故の発生率(1.92%)は、高齢者(65～74歳2.19%、75歳以上5.01%)に次いで高い。	図2-6	子どものけが・事故予防
2	■高齢者は、不慮の事故による死亡者の約8割を占め、救急搬送を必要とするけがや事故の発生率(65～74歳2.19%、75歳以上5.01%)も最も高い。	図2-3 図2-6	高齢者の安全
3	■障害者のけがの経験率は、区民平均よりも高く、特に、視覚障害者の経験率(2019年41.0%)は区民平均(2021年9.8%)の4倍を超えている。	図2-13	障害者の安全
4	■交通事故の発生は減少傾向にあるが、自転車による交通事故の割合(57.3%)は、国(22.8%)・東京都(48.3%)よりも高い。	図2-14	自転車利用の安全
5	■加害が原因で救急搬送を必要とするけが(51.5%)、犯罪(47.2%)の大半は池袋駅周辺の繁華街で発生している。	図2-17 図2-19	繁華街の安全
6	■火災に弱い木密地域が多く存在し、建物棟数の密度が23区中最も高いレベル(40.4棟/ha)であり、災害時に被害拡大のおそれがある。	図2-29	地震災害の防止
7	■児童虐待等相談発生率(9.8%)は増加傾向にあり、区部平均(3.4%)より高い。	図2-20	児童虐待の防止
8	■パートナーから暴力を受けたことがある人の割合は減少したが、DV相談件数は増加傾向にある。	図2-21 図2-22	ドメスティック・バイオレンス(DV)の防止
9	■10～39歳では、自殺が年齢別死因順位の第1位となっている。	表2-1	自殺・うつ病の予防

